



Harbour Street

ハーバー・ストリート

哀愁の街がど







物語

1943年のロンドン。戦況はせつぱつまり、死はすべての人々の身边にあった。なによりも、勇気と名誉、情熱と犠牲が望まれる時代であった。これは、そうした時代と街のただ中でふと知り合い、恋におちた男と女の物語である。

戦時下のロンドンは霧のためばかりでなく灰色であった。配給キップを持って今日の食料確保のために長い列を作る人々の顔に表情はなく、その中を歩く兵士の顔にも、ただ憑かれたような暗さだけが漂っていた。

この街の唯一の色どりは赤い二階建てのバスであった。と、いましもやって来るそのバスに行列を押しつけて乗ろうとする女がいた。ハロラン中尉(ハリソン・フォード)はそんな彼女を押しやると、バスの後部にしがみついた。すると、女は急にしゃがみ込み、「赤ちゃんが……」と顔をゆがめた。ところが、あわてて飛び降りたハロラン中尉に向かって女は高らかに笑ってみせた。うそだったのだ。ハロラン中尉はそん

な女に悲しげな笑いを残すと歩み去った。片足を不自由そうに引きずりながら……。女はハッとした。「すみません、私……」自責の念で顔青ざめた彼女の前で、今度はハロラン中尉が元氣よく跳び上がった。

これが、ハロランとマーガレット・セリンジャー(レスリー＝アン・ダウン)の宿命的な出会いとなった。

「バスがいやならコーヒーでもどう？」ハロランの誘いにマーガレットは「飲まないわ」とつねなく答えた後で、いたずらっぽく「紅茶なら」とつけ加えた。なんて美しい女だ——テーブルを間に向き合ったマーガレットを見て、ハロランは息を呑んだ。B 25爆撃機のパイロットとして、生と死の境を綱渡りしながら生きている彼にとって、この美はさかろうことの出来ない類のものであった。

「帰したくない」…だが、彼女は「帰るわ」の一点張り。かと思うと、抱き寄せた彼の腕の中でくずれそうになり、しかし、「木曜日に」というハロランの言葉にカプリを振り、名前さえ告げようとはしなかった。「時間がないんだ」——ハロランは離すまいと彼女の

手を握った。その時、手袋がとれ、彼女の左手の薬指の指輪が光った。そうだったのか。彼女は一瞬泣きそうな顔で「もう遅いわ」と叫ぶと、雑踏の中に消えた。

ルノアンの北々東にある敵軍貯蔵庫攻撃の危険な空の旅から帰ったハロラン中尉は次の木曜日、ハノーバー・ストリートに約束の場所に向った。一時間が過ぎ、二時間が過ぎた。そしてタバコの一箱がすっかりなくなり、ハロランがその場を立ち去ろうとした時マーガレットはやって来た。二人にもう言葉はいらなかった。シブて郊外の静かなホテルに到着くと、二人は激しく抱擁をくり返した。

マーガレットの脳裏を、やさしい夫とかわいい娘の姿がよぎった。だが、マーガレットの気持は、自分の力ではどうしようもないほど走り始め、ハロランとの逢引きをやめることは出来なかった。「忘れようとしてもだめ、あなたを求める気持ちがこわい」ハロランの腕の中で歓喜の叫びを上げながら、マーガレットの心は苦しんだ。家にいて、幸せな団らんを過ごす時にも、マーガレットの心は時として宙をさまよい、



ハロランを思った。

寛容で情み深い夫のボール・セリンジャー（クリストファー・プラマー）は、そんな妻の変化にいち早く気づいたが、何も言わずひたすらやさしく振舞っていた。

そんなある日、セリンジャーは、ドイツ軍の本部に乗り込んで、その金庫から重要書類を盗むという特殊任務を遂行するため、妻には内緒で旅立って行った。諜報機関のトップにいる彼が、部下の任務を代行するなど異例といえは異例、まさに青天のへきしきというてよかった。だが、妻を失うかも知れないという時、セリンジャーの心にある勇気が芽生えたのである。

セリンジャーをドイツ軍領内に飛行機で送り込むことになったのは、皮肉なことにマーガレットを知って以来、死に対してひどく臆病になってしまったハロランであった。もちろん、二人はお互いを知らなかったが、こうしてマーガレットによって結び合わされた二人の男は、危険な任務に旅立ち、ドイツ軍に攻撃されて飛行機が炎上した後には思ってもみない二人三脚で、ドイツ兵になりすまし、ドイツ軍本部に乗り込むことになってしまった。

り込むことになってしまった。

ドイツ軍の軍服を着こみ、将校とその部下になりすました二人は、あまりの堂々ぶりで周囲をクムにまき、あわやというところでその秘密金庫から重要書類を盗み出すことに成功したが、ハイエナのようなドイツ軍の追跡をうけることになった。もしかしたら、二人はこのまま死ぬかもしれない。そんな時、セリンジャーは口グレットの小さな写真をハロランに見せて、この美しい特別な女のためにも勇気を持って生きたいと語った。その写真の人はハロランがいまもっとも愛するマーガレットであった。この女がいるから生きたいと思ったその人は、いま目の前にいるセリンジャーの妻であったのだ。そう知った時、ハロランの心にやすここの出来ない悲しみと一つの決意が生まれた。

ドイツ軍は、なんとしても二人を捕えようと、無力なまま逃げ回る二人に容赦なく砲火を浴びせて来た。ドイツ軍のオートバイで深い谷間を曲芸まがいのジャンプで越え、つり橋をさしかかると、ドイツ軍の集中砲火はセリンジャーの体を射ち抜き、つり橋を二つ

に引き裂いた。ずるずるとセリンジャーは落ちる。「お願いだ、勇敢に死んだと妻に伝えてくれ。」だが、その手をハロランがつかんだ。

マーガレットは、ハロランといつも待ち合わせたハノーバー・ストリートで、便りもないまま来なくなった恋人を待ち暮らし、何も言わずに旅立った夫の安否を気遣っていた。その愛する二人が、危険な旅をと共にし、しかもハロランが夫を助けたなんて……。

夫が収容された病院の廊下でマーガレットは狂おしく愛したハロランとすれ違った。ハロランは相変わらず力強くやさしかった。「君の目はなんという美しさだ。」ハロランの言葉にマーガレットは答える言葉がなかった。「あなたが助けてくれたのね」

「愛しているわ、ハリー」

「愛してるよ、マギー、紅茶を飲むたびに思い出してくれ」

短い会話の後、マーガレットは夫のいる病室へ向い、ハロランはそのまま外へ出た。彼はいま、まっすぐ前を見たまま、思い出のハノーバー・ストリートを横切ろうとしていた。







ピーター・ハイアムズ監督の メロドラマ先祖がえり

映画評論家 小藤田千栄子

CBSのドキュメンタリー出身ピーター・ハイアムズ監督は、まず「カプリコン1」で知られる人である。これは、火星着陸の宇宙中継は、実は、地上のスタジオからの中継だったという、テレビ万能時代のからくりを、サスペンスいっぱい描いたもので、いかにもジャーナリスト出身らしい鋭利さを見せつけた作品であった。だが、この人の名を最初にきざみつけられたのは、キャンティス・バーゲン主演の「愛はひとり」(72・5・20封切り)のときである。これは、いま考えても、70年代の後半に出てくる、いわゆるヒロイン映画の“はしり”ともいえる作品だと思うのだが、この映画でピーター・ハイアムズは、製作と脚本を担当していた。監督は、のちに「愛と喝采の日」や「グッバイガール」を撮るハーバート・ロスである。キャンティス・バーゲン扮するヒロインは、オハイオの田舎から、ひとりシカゴに出てきたとして、都会で、女の子が1人暮らしをするということの寂寥感みたいなものが、淡々と描かれた傑作であった。ハエが一匹とんできても、大さわぎになるような管理されたオフィスで働き、やっと心のあたたかそうな男に出あったと思ったら、その男は、テートの翌

朝、彼女にタフシー代だと言って、いくばくかのお金を渡し、それはもしかしたら、本当にタフシー代だったのかも知れないが、お金を渡されたということで、いたく傷ついてしまう、そんなエピソードが印象的な作品であった。自分のアパートに帰った彼女は、田舎の両親に電話をかけ、泣きながら「私は元気だから心配しないで」と言うのだが、決して弱音をはかず、せいっぱい突っぱって生きていく、あるいは、生きていかざるを得ない都会の女の子を創り出して、ピーター・ハイアムズは、新しいヒロイン映画の時代の、先陣をきったと思えるのである。

この人には他に、エリオット・グールド主演の「破壊!」(74・5・4封切り)というポリス・アクションもあるが、作品を作るたびに、それぞれジャンルが違うのが、今日までの特徴である。よほどの才人と言うべきだろうか。その才人ふりが、今回の、クラシックなラブ・ストーリー「ハンナ・バーストリー」を作らせたと言えるであろう。「愛はひとり」の対極にあるとも言える、このラブ・ストーリーは、最近あまり見かけなくなってしまった大妻と青年との話である。近作にもう一本、このパターンでは、リリー・ト

ムリンとジョン・トラボルタの「年上の女」があるが、どうも最近では、この逆、若い女の子と、妻子ある中年男の話が全盛のようである。映画の場合は、昔ほどには、男が映画を見ない時代だから、ということが考えられるが、文学の世界も、ほぼ同様であるらしいのは、いったいどういうことなのだろうか。

まあ、それはともかく、ピーター・ハイアムズのアシスタントでキャスティングされた主演者二人が、まず、この映画の魅力である。ハリソン・フォードは、ご存知「スター・ウォーズ」のスター。あの、ハン・ソロ船長である。「スター・ウォーズ」のあと、ベトナム帰還兵のひとり演じた「幸福の旅路」(パート2)ものの戦争アクション「ナポレオンの嵐」と、着実に歩を進め、こんどは初めてのラブ・ストーリー。空軍中尉で、ちょっと「ナポレオンの嵐」の続きみたいだが、パイロットの制服がよく似あって、新しくファンになる人も多いだろう。

相手役のレスリー・アン・ダウンは、最近出てきた新人さんのなかでは、いちばんの美貌スターである。この作品では、ちょっと堅すぎて、驚くような美人だとは思わない人もいるかも知れないが、でもホント、この人は、もの



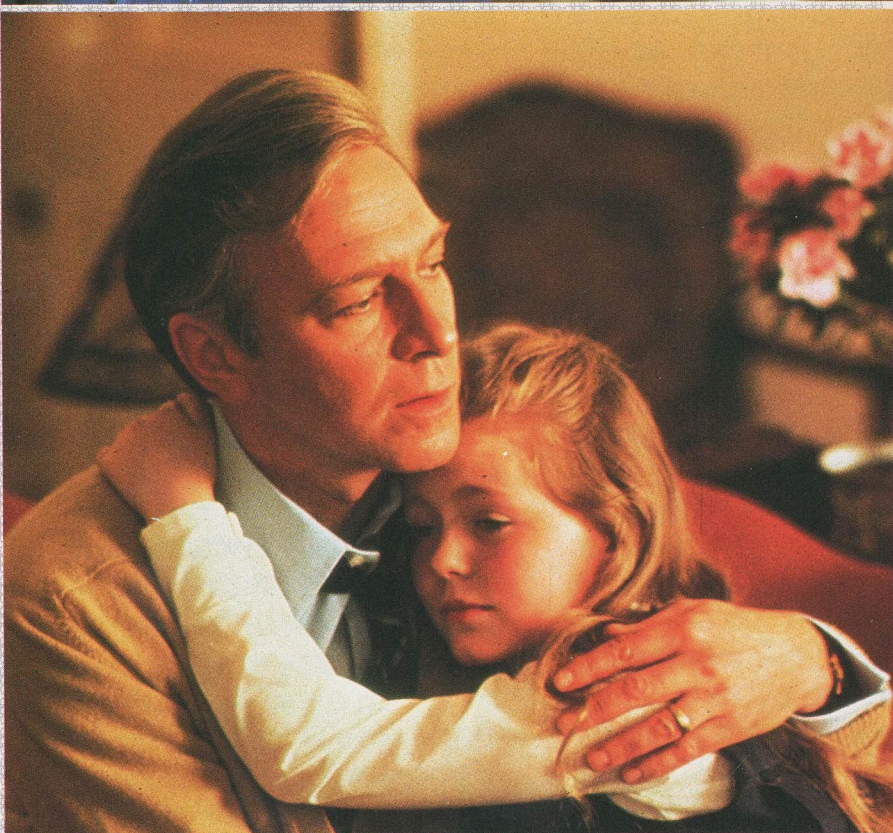
すごくきれいな人である。BBCテレビの「アップ・ステア&ダウン」ステア」という連続ホーム・ドラマで出てきた人だが、これは、イギリス上流階級の一軒の家を舞台に、その主人一家と、使用人グループとを描いたもので、階級制度に皮肉をきかせた、イギリスならではの人気ドラマであった。日本初お目見得は「ハッツィー」。この映画を見た人は、彼女の美貌ぶりを、よくおぼえているはずである。近く公開の「大列車強盗」では、ショーン・コネリーと組んで、世紀の犯罪グループの一員をやっている。

ピーター・ハイアムズ、ハナ・フオード、レスリー・アン・ダウンの初顔あわせの三人だが、この、おののがたにとっても、かくもクラシカルなラブ・ストーリーは初めてのことであろう。何故？ いま？ という感じがしないでもないが、スクリーンの中にひとつの時代をとじこめ、その中で完成された世界を構築しているのが、この作品の、最近では珍しい点であろう。オープニングの出会い、やや凝りすぎの感もあるが、中尉が、彼女の美しさに惹かれていく過程はうまく出ていたと思う。「哀愁」や「君の名は」を例に出すまでもなく、戦争とい

うものは、映画にとつてはドラマを作りやすい背景で、それゆえ、平和の時代にはメロドラマは出来にくく、たとえばミケランジェロ・アントニオーニの諸作品のように、人間の内へ内へとカメラは入りこんでいくという言い方があるが、ハイアムズ監督は、そんな時代を経たあとで、もういちどメロドラマの先祖がえりをしたような、そんな趣きのある作品である。美男美女は、妙な屈折などしないで、ひと目で恋に陥ちねばならず、そして、ひとたび恋に陥ちたならば、花も嵐も……ではないけれど、その道ひとすじに進んでいかなければならないという、ある種のルールを、そのままに踏んだ作品である。そして、こんな古典的ルールの踏襲は、小道具をうまく使うことでも表わされている。それは例えば、コーヒーはダメだけれど紅茶ならオーケーよ、といったことで、イギリス婦人を表わしたり、あるいは、手袋がとれたとたんに、左の薬指にリングが光っていたり、またあるいは、クリストファー・ブラマーが、ロケットの中の写真を見せたりといった使い方は、クラシカルなドラマの具体的表現であり、そして何よりも「ハノーバー・ストリート」というタイトルそのものが、それを如

実に表現している。言うまでもなく「哀愁」のウォータールー・ブリッジ、「君の名は」の数寄屋橋に匹敵する所である。余談だが「ハノーバー・ストリート」とは、ロンドンのオックスフォード・サーカスのすぐ近くにある、あの「ハノーバー・ストリート」のことであろうか。映画に出てきた「ハノーバー・ストリート」が、私が知っているハノーバー・ストリートであるならば、日本からの旅行者には、おなじみの所であるはずである。オックスフォード・サーカスからピカデリー・サーカスに向かって一本目の右側の道、あそこには、日航のロンドン支店や、東京銀行があつて、行ったことのある人も多いのでは。もっとも、ロンドン郊外のスタジオに、オープン・セットを張って撮影したという「ハノーバー・ストリート」は、現在のそれとは全く違うものではあったけれど。

ピーター・ハイアムズ監督が、メロドラマの先祖帰りをしたこの作品は、期待のスターを並べて、ひとつの世界を構築したところに面白さがある。そして、この作品でも、ピーター・ハイアムズは、オ人ぶりを示し、この次はいつたい、どんなジャンルに挑むのだろうという楽しみを、私たちに残したのである。





発行所 東京都千代田区有楽町1-2-1 東宝株式会社事業部
発行者 東京都千代田区有楽町1-2-1 大橋雄吉
© 発行権者 東京都港区新橋2-5-4 兼坂ビル
コロムビア映画会社

定価 200円



Hanover Street